



TITLE:

朱子語類論文篇譯注(六)

AUTHOR(S):

興膳, 宏; 木津, 祐子; 齋藤, 希史

---

CITATION:

興膳, 宏 ...[et al]. 朱子語類論文篇譯注(六). 中國文學報 2000, 60: 65-82

ISSUE DATE:

2000-04

URL:

<https://doi.org/10.14989/177853>

RIGHT:

## 朱子語類論文篇譯注 (六)

興膳宏

木津祐子

京都大學

齋藤希史

國文學研究資料館

12 李太白詩不專是豪放、亦有雍容和緩底、如首篇「大雅久不作」、多少和緩。陶淵明詩人皆說是平淡。據某看、他自豪放、但豪放得來不覺耳。其露出本相者是詠荆軻一篇、平淡底人如何說得這樣言語出來。雖。

李太白的詩は豪放なものばかりではなく、おだやかでゆったりとしたものもある。(古風) 第一篇の「大雅久しく作らず」などは、何とゆったりしていることか。陶淵明の詩は誰もが平淡だというのが、私から見れば、彼はもともと豪放なのだが、豪放さがそれと感じられないだけなの

朱子語類論文篇譯注 (六) (興膳・木津・齋藤)

だ。その本来の姿が現れたのが「荆軻を詠ずる」詩一篇で、平淡な人間にどうしてこんな言葉が吐けるものかね。吳雉記す。

(校勘) 朝鮮古寫本 「這樣」↓「道樣」

(注) 「雍容」は、疊韻の語。おだやか。「陳仲亨說「至

德」、引義剛前所論者爲疑。曰、「也不是不做這事、但他做得較雍容和緩、不似武王樣暴。」(論語十七 泰伯篇 泰伯其可謂至德章) 三五・908)

「大雅久不作」は、李白「古風」五十九首の其一冒頭の句。

「詠荆軻」は、『陶淵明集』卷四。

13 張以道問、「太白五十篇古風不似他詩、如何。」曰、「太白五十篇古風是學陳子昂感遇詩、其間多有全用他句處。」義剛。

張以道が尋ねるには、「太白の「古風」五十篇は彼の詩らしくないのですが、どういうことでしょう。」いわれるには、「太白の「古風」五十篇は陳子昂の「感遇」詩にならったもので、そこには彼の句をそのまま使ったところが多々あるのだ。」黄義剛記す。

(校勘) 朝鮮古寫本 12條の前に位置する。

〔注〕 「張以道」は、『論文篇上』55條を参照。

「陳子昂」は、字は伯玉、六六一―七〇二。ちなみに李白は七〇一年に生まれている。『陳伯玉文集』十卷。『舊唐書』卷一九〇中、『新唐書』卷二〇七。

「感遇詩」は、三十八首からなる連作。『陳伯玉文集』卷一。「灼灼佳人姿」(「感遇」)「灼灼芙蓉姿」(「古風」)、「探元觀群化」(「感遇」)「探元化群生」(「古風」)、「登山望宇宙」(「感遇」)「登高望四海」(「古風」)のように類似した句が見られ、詩風に共通するところも多い。「古風」詩が「感遇」詩の流れを受けていることは、例えば「太白古風云、……此六十八首、與陳拾遺感遇之作筆力相上下、唐諸人皆在下風。」(『劉克莊詩話』)などのように、後代の定論となる。

14 杜詩初年甚精細、晚年横逆不可當、只意到處便押一箇韻。如自秦州入蜀諸詩、分明如畫、乃其少作也。李太白詩非無法度、乃從容於法度之中、蓋聖於詩者也。古風兩卷多效陳子昂、亦有全用其句處。太白去子昂不遠、其尊慕之如此。然多爲人所亂、有一篇分爲三篇者、有三篇合爲一篇者。方子。佐同。

杜詩は若い頃のものとはとてもきめこまやかだったが、晩年のものとはとめどがなくて手が着けられない。思いつきさ

えすれば何でも韻を踏んで詩にしているだけだ。秦州から蜀に入った時の諸詩は、繪のようにくつきりしているが、やはり若いころの作だ。李太白の詩はきまりがないわけではないが、きまりの中でのびのびふるまっており、詩における聖人といえよう。「古風」二卷は陳子昂をだいぶ眞似ており、彼の句をそのまま使ったところもある。太白は子昂からさほど時代が隔たっているわけでもないのに、かくも敬慕している。けれども(「古風」詩篇は)人に亂されてしまったところが多く、一篇を三篇に分けられたものもあるれば、三篇を合わせて一篇にされてしまったものもある。李方子記す。蕭佐の記録も同じ。

(校勘) 朝鮮古活字本 「横逆」↓「横進」、「佐同」↓

「仕同」

朝鮮古寫本 「三篇合爲一篇」↓「二篇合爲一篇」

〔注〕 「横逆」は、朝鮮古活字本および朝鮮刊本では「横進」に作っており、ここではその方向で解した。

「古風」の篇數に出入のあることはよく知られている。「分類補注李太白詩」における「其二十」を繆武子重刊宋本『李太白全集』が三篇に分けるなどはその例である。ただし、朱子が「古風兩卷」といつていることから、彼の見た本は

今本と異なっており、具體的にどの篇の出入を指すのかは、定めがたい。詹鍈主編『李白全集校注彙釋集評』（百花文藝出版社、一九九六）参照。

15 李太白終始學選詩、所以好。杜子美詩好者亦多是效選詩、漸放手、夔州諸詩則不然也。雉。

李太白はずっと『文選』の詩を學んだから、よいのだ。

杜子美の詩のよいものもやはり『文選』の詩に倣って、だんだん手慣れてきたが、夔州の諸詩などはそうではない。

吳雉記す。

（校勘） 朝鮮古寫本 「效」↓「例」

（注） 李杜が『文選』の詩を學んだことについては、朱子の「跛病翁先生詩」（『文集』卷八四）に「李杜韓柳初皆學選詩者、然杜韓變多而柳李變少。變不可學而不變可學、故自其變者而學之、不若自其不變者而學之、乃魯男子學柳下惠之意也」のようにもいう。

「放手」は、思い通りになる、手慣れる、ということ。

「放脚放手」「放脚手」とも。「寶問、「前輩多言伊川似孟子。」曰、「不然。伊川謹嚴、雖大故以天下自任、其實不似孟子放脚放手。孟子不及顏子、顏子常自以爲不足。」（『孔孟周程張子』九三・2359）

朱子語類論文篇譯注（六）（興膳・木津・齋藤）

16 或問、「李白「清水出芙蓉、天然去雕飾。」前輩多稱此語、如何。」曰、「自然之好、又不如「芙蓉露下落、楊柳月中疏、則尤佳。」雉。

ある人が尋ねるのに、「李白の「清水 芙蓉を出だし、天然 雕飾を去る」の句を先人はさかに譽められますが、いかがでしょうか。」いわれるには、「自ずからなるよさだが、「芙蓉 露下に落ち、楊柳 月中に疏らなり」のほうがずっとよいね。」吳雅記す。

（校勘） 朝鮮古活字本・朝鮮古寫本 「疏」↓「疎」

（注） 「清水出芙蓉……」は、「亂離後天恩流夜郎憶舊遊書懷贈江夏韋太守良宰」（李白全集校注彙釋集評「卷一〇」）の句。『吾溪漁隱叢話』前集卷五には王安石の語を以下のように引く。「荆公云、詩人各有所得、「清水出芙蓉、天然去雕飾。」此李白所得也。……」

「芙蓉露下落……」は、蕭愨の「秋思」詩（『玉臺新詠』卷八）。また『顏氏家訓』卷四文章篇に「蘭陵蕭愨、梁室上黃侯之子、工於篇什。嘗有秋詩云、「芙蓉露下落、楊柳月中疎。」時人未之賞也。吾愛其蕭散、宛然在目。潁川荀仲舉、琅邪諸葛漢、亦以爲爾。而盧思道之徒、雅所不愜」とい、許顗『彦周詩話』に「六朝詩人之詩、不可不熟讀。如「芙蓉

露下落、楊柳月中疏」、鍛鍊至此、自唐以來、無人能及也」という。なお許顗は生卒未詳だが、百川學海本『彥周詩話』は建炎戊申（一一二八）序と記す。

17 「人多說杜子美夔州詩好、此不可曉。夔州詩却說得鄭重煩絮、不如他中前有一節詩好。魯直一時固自有所見。今人只見魯直說好、便却說好、如矮人看戲耳。」問、「韓退之潮州詩、東坡海外詩如何。」曰、「却好。東坡晚年詩固好。只文字也多信筆胡說、全不看道理。」雉。

「杜子美の夔州時代の詩を人はよく譽めるけれど、わからんね。夔州の詩は堅苦しくてくどくて、それ以前の時期の詩のほうがよい。（夔州の詩を譽めた）魯直には當時もちろん思うところがあったのだ。今の人はただ魯直がよいというから、よいといっているだけで、矮人の芝居見物のようなものだ。」「韓退之が潮州にいたころの詩や、東坡が海南島にいたころの詩はどうですか」と尋ねると、いわれるには、「あれはよい。東坡の晩年の詩はむろんよい。ただ文の方はしょっちゅう筆にまかせてでたらめをいい、何

の道理も分かっちゃいないがね。」吳雉記す。

（校勘） 朝鮮古寫本 「看戲」↓「看場」

（注） 「人多說杜子美夔州詩好」は、例えば「觀子美到夔州以後詩、簡易純熟、無斧鑿痕、信是如彈丸矣。」（杜工部草堂詩話）卷一引陳善『捫蝨新話』など。

魯直は黃魯直、黃庭堅のこと。黃庭堅が夔州以降の杜詩を稱賛したことは、例えば「好作奇語、自是文章病、但當以理爲主、理得而辭順、文章自然出羣拔萃、觀杜子美到夔州後詩、韓退之自潮州還朝後文章、皆不煩繩削而自合矣」（王觀復に與うる書）三首之一、「豫章黃先生文集」卷一九）といったのはよく知られている。また『茗溪漁隱叢話』には、「呂丞相跋杜子美年譜云、「考其筆力、少而銳、壯而肆、老而嚴、非妙於文章、不足以至此。」余觀東坡自南遷以後詩、全類子美、夔州以後詩、正所謂老而嚴者也。子由云、「東坡謫居儋耳、獨喜爲詩、精鍊華妙、不見老人衰憊之氣。」魯直亦云、「東坡嶺外文字、讀之使人耳目聰明、如清風自外來也。」觀二公之言如此、則余非過論矣。」（後集卷三〇）といい、韓愈の潮州での詩、蘇軾の海南島での詩としばしば並稱されていたことが分かる。『論文篇上』23條、56條参照。

「矮人看戲」は、朱子が好んで用いる當時の成語で、「矮子看戲」ともいい、背が低いために舞臺を直接見ることのできない「矮人」が、他の見物客の眞似をして手を叩いたり笑ったりするさまを、道理も分からずただ人眞似ばかりする

ことを皮肉るのに使う。「……問、「自後學言之、便道已知此事一理。今會子用許多積累工夫、方始見得是一貫、後學如何便曉得一貫。」曰、「後人只是想像說、正如矮人看戲一般、見前面人笑、他也笑。他雖眼不會見、想必是好笑、便隨他笑。」（論語九 里仁篇下 子曰參乎章 二七・688）、……其有知得某人詩好、某人詩不好者、亦只是見已前人如此說、便承虛接響說取去。如矮子看戲相似、見人道好、他也道好。及至問著他那裏是好處、元不曾識。舉世皆然、只是不曾讀。熟讀後自然見得。」（朱子十三 訓門人四）一一六・2802）

18 杜子美晚年詩都不可曉。呂居仁嘗言、詩字字要響。其晚年詩都啞了、不知是如何。以爲好否。

杜子美の晩年の詩はどれも分らん。呂居仁が以前「詩は一つ一つの字が響くようではなくてはいけない」といつていた。杜子美の晩年の詩はみな響きが無くなってしまったが、どういうわけだろう。よいとおもうかね。

（校勘） 朝鮮古寫本 本條を缺く

（注） 「呂居仁」は、呂本中、居仁は字、もとの名を大中東萊先生と號した。著に『春秋解』『東萊詩集』『紫微詩話』など。『宋史』卷三七六、『宋元學案』二〇。『苕溪漁隱叢話』に引く「呂居仁童蒙訓」に「潘邠老言、七言詩第五字要

響、如「返照入江翻石壁、歸雲擁樹失山村。」翻字失字、是響字也。五言詩第三字要響、如「圓荷浮小葉、細麥落輕花。」浮字落字、是響字也。所謂響者、致力處也。予竊以爲字字當活、活則字字自響」。また「杜工部草堂詩話」卷一には「東萊呂居仁曰、詩每句中須有一兩字響、響字乃妙指。如子美「身輕一鳥過」「飛燕受風斜」、過字受字皆一句響字也」とも引く。

19 杜詩、「萬里戎王子、何年別月支。」後說花云云、今人只說道戎王子自月支帶得花來。此中嘗有一人在都下、見一蜀人遍舖買戎王子、皆無。曰、「是蜀中一藥、爲本草不會收、今遂無人蓄。」方曉杜詩所言。

杜詩に「萬里 戎王子、何れの年か月支に別る」とあつて、その後で花がどうのこうのとあり、今の人はただ戎の王子が月支から花を持ってきたと説明するばかりだ。この地のある人が以前都で目撃した話に、ある蜀の人が店を回って戎王子を買おうとしたがどこにもない。そこで「これは蜀の藥で、本草にも收められておらず、いまでは誰も栽培していない」といつていたそうだ。それでやっと杜詩

の意味がわかった。

(校勘) 朝鮮古寫本 本條を缺く

(注) 「萬里戎王子、何年別月支」は、「陪鄭廣文遊何將軍山林」十首の三、「萬里戎王子、何年別月支。異花開絕域、滋蔓匝清池。漢使徒空到、神農竟不知。露翻兼雨打、開壻漸離披。」(『九家集注杜詩』卷一八)の句。『九家集注杜詩』は、「趙云、戎王子、說者以爲花名。義固然也。下句云異花、自分明矣。言萬里則其來遠、言月支是必月支之物」と注する。趙は、北宋・趙彥材。

「此中」は、この土地、當地、ということ。

20 文字好用經語、亦一病。老杜詩、「致遠思恐泥。」東坡寫此詩到此句云、「此詩不足爲法。」璘。

詩句に經典の語を好んで使うのも、弊害の一つだ。老杜の詩に「遠きを致すに思い恐らくは泥まん」とある。東坡はこの詩を寫してこの句まで來ると、「この詩は手本にはならん」といった。璘璘記す。

(校勘) 朝鮮古活字本 「致思遠」↓「致遠思」

朝鮮古寫本 本條を缺く

(注) 「致遠思恐泥」は、「解遣」(一作「解憂」)詩、「減米散同舟、路難恩共濟。向來雲濤盤、衆力亦不細。呀坑瞥眼

過、飛槽本無蒂。得失瞬息間、致遠宜恐泥。百慮視安危、分明曩賢計。茲理庶可廣、拳拳期勿替。」(『九家集注杜詩』卷一六)の句。『論語』子張篇の「致遠恐泥」を踏まえたもの。なお中華書局本は古活字本と同様「致思遠恐泥」に作るが、意味が通じないので、朝鮮刊本によって改めた。

蘇軾がこの句を非難したことは、『東坡題跋』卷二に、「減米散同舟、路難思共濟。向來雲濤盤、衆力亦不細。呀帆忽遇眠、飛槽本無蒂。得失瞬息間、致遠疑恐泥。百慮視安危、分明曩賢計。茲理庶可廣、拳拳期勿替。」杜甫詩固無敵、然自致遠以下句、真村陋也。此最其瑕疵瑣、世人雷同、不復譏評、過矣。然亦不能掩其善也」と見える。

21 杜詩最多誤字。蔡興宗正異固好而未盡。某嘗欲廣之、作杜詩考異、竟未暇也。如「風吹蒼江樹、雨洒石壁來」、「樹」字無意思、當作「去」字、無疑「去」字對「來」字。又如蜀有「漏天」、以其西北陰盛、常雨、如天之漏也、故杜詩云、「鼓角漏天東。」後人不曉其義、遂改「漏」字爲「滿」、似此類極多。雉。

杜詩には字の誤りがきわめて多い。蔡興宗の『正異』はよくできているが完全ではない。私は以前それを増補して、

『杜詩考異』を作ろうとしたが、その時間がないままになつてゐる。例えば「風は吹く 蒼江の樹、雨は石壁に洒ぎ來たる」は、「樹」の字では意味がなく、當然「去」の字にすべきで、「去」字が「來」字と對になつてゐるのだ。また例えば蜀には「漏天」があるというのは、西北は陰の氣が盛んなために、いつも雨が降つていて、さながら天が漏れてゐるようだというわけだ。だから杜詩に「鼓角 漏天の東」というのだ。後の人はその意味が分からずに、「漏」の字を「滿」に改めてしまった。こういった類がとても多い。吳雉記す。

(校勘) 朝鮮古寫本 上卷所收

(注) 「蔡興宗」は、字は伯世、徽宗の頃の人というほか未詳。『苕溪漁隱叢話』は彼と呂東萊の編に成る「重編少陵先生集竝考異」を藏すると記し(後集卷八)、周紫芝「竹坡詩話」には「東萊蔡伯世作杜少陵正異、甚有功、亦時有疑者……」という。『杜詩正異』とも稱され、『詩話總龜』後集卷十八「正訛門」には、もっぱら「杜詩正異」から三十條餘りを引く。

「風吹蒼江樹……」は、「雨」三首の一、「峽雲行清曉、煙霧相裴回。風吹蒼江樹、雨灑石壁來。淒淒生餘寒、殷殷兼出

朱子語類論文篇譯注(六)(興膳・木津・齋藤)

雷。白谷變氣候、朱炎安在哉。……」(『九家集注杜詩』卷一)の句。

「鼓角漏天東」は、「陪章留後待御宴南樓」(『九家集注杜詩』卷二四)、「絕域長夏晚、茲樓清宴同。朝廷燒棧北、鼓角滿(一作漏)天東。屢食將軍第、仍騎御史驄。本無丹竈術、那免白頭翁。……」の句。『九家集注杜詩』は、「趙云、漏天、在黎州、蜀之西蕃地多雨、故名漏天、則梓州當在其東、所以形容其地也。蔡伯世正異、漏天乃地名、在雅州、以其地多雨也、居梓州之西。正文訛作滿」と注する。

22 「天閣象緯逼」、蔡興宗作「天闕」、近是。蔡云、「古本作「闕」。史、「以管窺天。」佐。

「天閣 象緯逼り」を、蔡興宗は「天闕」に作るが、おそらく正しい。蔡は「古本に「闕」に作る」と云う。『史記』に「管を以て天を窺う」とある。蕭佐記す。

(校勘) 朝鮮古寫本 本條を缺く

(注) 「天閣象緯逼」は、「遊龍門奉先寺」(『九家集注杜詩』卷一)、「已從招提遊、更宿招提境。陰壑生虛籟、月林散清影。天閣象緯逼、雲臥衣裳冷。欲覺聞晨鐘、令人發深省」の句。『九家集注杜詩』の引く「蔡正異」は、「世傳古本作天闕。今從之。莊子以管闕天。正用此字」とする。『詩話總



龜』後集卷十八「正訛門」に引く「杜詩正異」では、「世傳古本作天闕。今從之。莊子以管闕天。正用此字。舊集以作闕又或作關、今不取。蓋先生詩該衆美者、不惟近體嚴於屬對、至於古風句對者、亦然。觀此詩可見矣。近人論詩、多以不必屬對爲高古、何耶。故詳論之以俟知者焉」とする。なお、ここに引く「莊子」は、秋水篇。

「以管窺天」は、『史記』卷一〇五扁鵲倉公列傳の「夫子之爲方也、若以管窺天、以郛視文。」

23 「杜子美「暗飛螢自照」、語只是巧。韋蘇州云「寒雨暗深更、流螢度高閣」。此景色可想、但則是自在說了。」因言、「國史補稱韋「爲人高潔、鮮食寡欲。所至之處、掃地焚香、閉閣而坐。」其詩無一字做作、直是自在。其氣象近道、意常愛之。」問、「比陶如何。」曰、「陶却是有力量、但語健而意閑。隱者多是帶氣負性之人爲之。陶欲有爲而不能者也、又好名。韋則自在、其詩直有做不著處便倒塌了底。晉宋閒詩多閑淡。杜工部等詩常忙了。陶云「身有餘勞、心有常閑」、乃禮記「身勞而心閑則爲之也」。方。

「杜子美の「暗飛 螢自照らす」は、とにかくうまい

表現だ。韋蘇州が「寒雨 深更に暗く、流螢 高閣を度る」と云うのは、情景はよくわかるが、ただひたすらきまみに述べている。」そこでいわれるには、「唐國史補」には韋が「高潔な人柄で、少食寡欲であつた。どこに行つても、地を掃き清めて香を焚き、門を閉ざして坐していた」といつている。彼の詩は一字も作爲がなく、ひたすらきままなのだ。彼の氣象は道に近く、心は常に道を大事にしていた。「陶（淵明）」と比べてどうでしょうか」とお尋ねすると、言われるには、「陶には力がある。ただ言葉は力強くても心は静かだ。隱者というのはいちいち氣性が強く己を恃むような人物がなるものだ。陶は世に志がありながら果たせなかつた人で、名聲を求めていた。韋はきままで、彼の詩にはうまく行かなければそのまま駄目になつてしまふところがある。晉宋のころの詩には閑かであつさりしたものが多い。杜工部などの詩はいつもせわしない。陶は「身に餘勞有り、心に常閑有り」といつたが、これは「禮記」の「身は勞すれども心閑なれば則ち之を爲すなり」ということだ。楊方記す

〔校勘〕 朝鮮古活字本 「氣負性」↓「性負氣」

朝鮮古寫本 本條を缺く

〔注〕 「暗飛螢自照」は、「倦夜」〔九家集注杜詩〕卷二四、「竹涼侵臥內、野月滿庭隅。重露成涓滴、稀星乍有無。暗飛螢自照、水宿鳥相呼。萬事干戈裏、空悲清夜徂」の句。

「韋蘇州」は、韋應物。「寒雨暗深更……」は、「寺居獨夜寄崔主簿」〔「韋蘇州詩集」卷二〕、「幽人寂不寐、木葉紛紛落。寒雨暗深更、流螢度高閣。坐使青燈曉、還傷夏衣薄。寧知歲方晏、離居更蕭索」の句。

「國史補」は李肇「唐國史補」。卷下に「韋應物立性高潔、鮮食寡欲。所至焚香掃地而坐。其爲詩、馳驟建安以還、各得其風韻」と見え、「語類」と若干の異同が見られる。

「身有餘勞……」は、陶淵明の「自祭文」の句にもとづくが、「陶淵明集」卷七では、「勤靡餘勞、心有常閑」とする。

「身勞而心閑則爲之也」の句は、「禮記」には見えない。

「語類」には他に「季繹勸蔡季通酒、止其泉南之行。蔡決於先生、先生笑而不答。良久、云、「身勞而心安者爲之、利少而義多者爲之。」人傑。廣錄云、或有所欲爲、謀於先生。曰、「心佚而身勞、爲之。利少而義多、爲之。」」〔朱子十七訓門人八〕二〇・2916と見える。

24 韋蘇州詩高於王維孟浩然諸人、以其無聲色臭味也。方韋蘇州の詩が王維・孟浩然たちより調子が高いのは、聲も

色も臭いも味もないからなのだ。楊方記す

〔校勘〕 朝鮮古寫本 本條を缺く

〔注〕 「無聲色臭味」は、「中庸」に「子曰、聲色之於以化民末也。詩曰、德輶如毛、毛猶有倫、上天之載、無聲無臭。至矣」とあるのにもとづく。

25 韓詩平易。孟郊喫了飽飯、思量到人不到處。聯句中被他牽得、亦著如此做。

韓（愈の）詩は平易だ。孟郊は腹一杯飯を食っていたら、人の思い至らぬところまで考えが及んでいたろうに。聯句では彼（韓愈）に引つ張られて、ここまてになった。

〔校勘〕 朝鮮古寫本 本條を缺く

〔注〕 「聯句」は、いわゆる韓孟聯句。「城南聯句」「鬪雞聯句」など。

「孟郊喫了飽飯……」は、韓愈「答孟郊」（「昌黎先生集」卷五）の「人皆有餘酒肉、子獨不得飽」を踏まえたものである。

「聯句中被他牽得……」は、孟郊が韓愈に引つ張られて、すぐれた句を生み出したことをいうと解した。「徐師川問山谷云、「人言退之東野聯句、大勝東野平日所作、恐是退之有所潤色。」山谷云、「退之安能潤色東野、若東野潤色退之、即

有此理」(呂本中『童蒙詩訓』)とあるように、孟郊のふだんの作よりも韓愈との聯句の方がすぐれていると、一般には認識されていた。

26 人不可無戒慎恐懼底心。莊子說、庖丁解牛神妙、然才到那族、必心恍然爲之一動、然後解去。心動便是懼處。韓文鬪雞聯句云、「一噴一醒然、再接再礪乃」、謂雖困了、一以水噴之便醒。「一噴一醒」、卽所謂懼也。此是孟郊語、也說得好。又曰、「爭觀雲填道、助叫波翻海。」此乃退之之豪。「一噴一醒然、再接再礪乃。」此是東野之工。雉。

人は慎み恐れる心がなくてはならん。莊子に「庖丁が牛を解體するのは神業だが、こみいった箇所に來ると、必ず心がびくと震え、それから捌いていく」という。心がびくとするのが恐れるところなのだ。韓文の「鬪雞聯句」には、「一たび噴すれば一たび醒然、再び接すれば再び礪乃」というが、疲れ果てていても、水を吹きかければ目が醒めることをいう。「一たび噴すれば一たび醒む」とは、いわゆる恐れることだ。これは孟郊のことばだが、うまい

表現だ。」またいわれるには、「争いて觀れば 雲は道に填ち、助けを叫べば 波は海に翻る」は退之の豪快なところだ、「一たび噴すれば一たび醒然、再び接すれば再び礪乃」は、東野の巧みなところだ。吳雉記す。

(校勘) 朝鮮古活字本 「然後解去」↓「然後解云」  
朝鮮古寫本 本條を缺く

(注) 「庖丁解牛」の事は、「莊子」養生主篇に見える。この引用は全體の意を取つたものだが、とくに「每至於族、吾見其難爲、恍然爲戒、視爲止、行爲遲。動刀甚微、謦然已解、如土委地」などの箇所に對應しよう。また、「讀書法上」13・14・15條を參照。

「一噴一醒然……」「爭觀雲填道……」は、「鬪雞聯句」(昌黎先生集)卷八の句。「大鷄昂然來、小鷄竦而待(愈)。崢嶸頓盛氣、洗刷凝鮮彩(郊)。……知雄欣動顏、怯負愁看睂。爭觀雲填道、助叫波翻海(愈)。事爪深難解、噴晴時未怠。一噴一醒然、再接再礪乃(郊)。……」

27 韓退之詩云「強懷張不滿、弱念闕易盈。」上句是助長、下句是歉。雉。

韓退之の詩に「強懷 張れども滿たず、弱力 闕くるも盈ち易し」とあるが、上の句は無理な背伸びで、下の句は

心細い。吳雉記す。

(注) 「強懷張不滿……」は、「秋懷」十一首の十(昌黎先生集「卷一」)の句。ただし「昌黎先生集」は「強懷張不滿、弱念缺已盈。已或作易」に作る。

28 退之木鵝詩末句云「直割蒼龍左耳來。」事見龍川志、正是木鵝事。

退之の「木鵝」の詩の結びに「直ちに蒼龍の左耳を割きて來たる」とあるが、この故事は「龍川志」に見え、まさしく木鵝の事だ。

(校勘) 朝鮮古寫本 本條を缺く

(注) 「木鵝」は、きくらげ。

「直割蒼龍左耳來」は、「答道士寄樹雞」(「昌黎先生集」卷十)の句。ただし「昌黎先生集」は、「直割乖龍左耳來」に作る。「軟濕青黃狀可猜、欲烹還喚木鵝迴。煩君自入華陽洞、直割乖龍左耳來。」

「龍川志」は、蘇轍に「龍川略志」のあることが思い起こされるが、この記事は、柳宗元「龍城錄」下に「茅山道士吳綽、初因採藥於華陽洞口、見一兒手把大珠三顆、其色瑩然、戲於松下。綽見之、因前詢誰氏子、兒奔忙入洞中、綽恐爲虎

所害、遂連呼相從入欲救之、行不三十步見兒化作爲龍形、一手握三珠填左耳中、綽素剛膽以藥斧斷之、落左耳而三珠已失所在、龍亦不見。出不十餘步、洞門閉矣。……」とあるのを指すだろう。

29 「李賀較怪得些子、不如太白自在。」又曰「賀詩巧。」義剛。

「李賀はいささか變わっているが、太白がきままなのは及ばない。」またいわれるには、「賀の詩は巧みだ。」黄義剛記す。

(校勘) 朝鮮古活字本・朝鮮古寫本 「怪」↓「怪」

(注) 「李賀」は、字は長吉。七九一〜八一七。

「較得些子」は、いささか、という意。

30 劉又詩「斗柄寒垂地、河流凍徹天。」介甫詩「柳樹鳴蜩綠暗、荷花落日紅酣。」王建田家留客云「丁寧回語屋中妻、有客莫令兒夜啼。」方子。

劉又の詩に「斗柄 寒くして地に垂れ、河流 凍りて天に徹る」とあり、介甫の詩に「柳樹 鳴蜩 綠暗く、荷花 落日 紅酣なり」とあり、王建的「田家 客を留む」に

「丁寧に回語す 屋中の妻に、客有り 兒をして夜啼かしむる莫かれ」と云う。李方子記す。

（校勘）朝鮮古活字本・朝鮮古寫本 「介甫」↓「介父」

（注）「劉又詩」は、「塞上逢盧全」（『全唐詩』卷三九五）。

「直到桑乾北、逢君夜不眠。上樓腰脚健、懷土眼睛穿。斗柄寒垂地、河流凍徹天。羈魂泣相向、何事有詩篇。」劉又是、生卒未詳。

「介甫詩」は、王安石「題西太一官壁」二首の一（『王荆文公詩集』卷四〇）。「柳樹鳴蟬綠暗、荷花落日紅酣。三十六陂春水、白頭想見江南。」

「王建田家留客」は、『王建詩集』卷一。「人客少能留我屋、客有新漿馬有粟。……丁寧回語屋中妻、有客莫令兒夜啼。雙冢直西有縣路、我教丁男送君去。」

31 「詩須是平易不費力、句法混成。如唐人玉川子輩句語雖險怪、意思亦自有混成氣象。」因舉陸務觀詩、「春寒催喚客嘗酒、夜靜臥聽兒讀書。」「不費力、好。」賜。

「詩は平易で無駄な力を用いず、組立てが混然一體としていなくてはならない。唐の玉川子などことは險怪だが、内容はやはりおのずと混然一體とした氣象がある。」そこ

で陸務觀の詩に「春寒くして 客を催し喚びて酒を嘗む、夜靜かにして 臥して聽く 兒の書を読むを」とあるのを舉げて、「力が入っていないくて、よい」といわれた。林賜記す。

（校勘）朝鮮古活字本 「怪」↓「恠」

朝鮮古寫本 「句語」↓「句語林本有語字」、「意思亦有」↓「意思林本无亦字、作意思二字」、「混成氣象」↓「混成底林无底字氣象」、「因舉」↓「如林作因舉」、「賜」↓「雉。賜錄少異」

（注）「不費力」は、むだな力が抜けていること。「聖人之恕與學者異者、只爭自然與勉強。聖人却是自然擴充得去、不費力。學者須要勉強擴充、其至則一也。」（『論語九 里仁篇下 子曰參乎章』二七・672）

「混成」は、「渾成」「滾（衰）成」とも書き、また「滾（衰）作一片」というのと同じく、すべてが融合して一體となったさまをいう。「……如金石絲竹、匏土革木、雖是有許多、却打成一片。清濁高下、長短大小、更唱迭和、皆相應、渾成一片、有自然底和氣。……」（『論語十七 泰伯篇 興於詩章』三五・934）

「玉川子」は、盧全の號。？一八三五。

「陸務觀」は、陸游。一二五〇。務觀は字。放翁と號す。「春寒催喚客嘗酒……」は「題城南堂」二首（劍

南詩稿』卷一九)の第二。「借問城南老居士、新年樂事復何如。春寒催喚客嘗酒、夜靜臥聽兒讀書。」

32 「行年三十九、歲莫日斜時。孟子心不動、吾今其庶幾。」此樂天以文滑稽也。然猶雅馴、非若今之作者村裏雜劇也。方子。佐同。

「行年三十九、歲莫<sup>さいぼ</sup>日斜めならんとする時。孟子心動かず、吾今其れ庶<sup>ちか</sup>幾し」というのは、樂天が言葉でふざけているのである。けれどもやはり品があつて、今の詩を作る者の村芝居風とはちがう。李方子記す。蕭佐の記録も同じ。

(校勘) 朝鮮古寫本 「歲莫」↓「歲暮」、「滑稽」↓「滑稽」、「佐同」↓缺

(注) 「行年三十九……」は、「隱几」(『白氏長慶集』卷六)。ただし「孟子心不動」を「四十心不動」に作る。この句は『孟子』公孫丑上に「我四十心不動」とあるのにもとづく。

33 白樂天琵琶行云「嘈嘈切切錯雜彈、大珠小珠落玉盤」云云、這是和而淫、至「淒淒不似向前聲、滿坐重聞皆掩泣。」這是淡而傷。道夫。

朱子語類論文篇譯注(六)(興膳・木津・齋藤)

白樂天の「琵琶行」に「嘈叫切切 錯雜として彈き、大珠小珠 玉盤に落つ」云云は、調子は整っているが溺れすぎで、「淒淒として向前の聲に似ず、滿坐 重ねて聞けば皆掩泣す」になると、情は浅いのに感傷が過ぎる。楊道夫記す。

(校勘) 朝鮮古活字本・朝鮮古寫本ともに 「掩泣」↓「掩泣」 中華書局本のみが「掩」と作するため、本文を改めた。

(注) 「琵琶行」は、『白氏長慶集』卷二。「……大弦嘈叫如急雨、小弦切切如私語。嘈叫切切錯雜彈、大珠小珠落玉盤。……感我此言良久立、卻坐促弦弦轉急。淒淒不似向前聲、滿坐重聞皆掩泣。就中泣下誰最多、江州司馬青衫濕。」

「和而淫」および「淡而傷」は、『論語』八佾の「子曰、關雎、樂而不淫、哀而不傷」を踏まえたもの。

34 唐文人皆不可曉。如劉禹錫作詩說張曲江無後、及武元衡被刺、亦作詩快之。白樂天亦有一詩暢快李德裕。樂天、人多說其清高、其實愛官職。詩中凡及富貴處、皆說得口津津地涎出。杜子美以稷契自許、未知做得與否。然子美却高、其救房琯、亦正。必大。

唐の文人は皆わけがわからん。劉禹錫などは詩で張曲江に後繼がないことをいい、武元衡が刺殺されると、また詩を作って快哉を叫んだ。白樂天にも李德裕の失脚に手を叩いて喜んだ詩がある。樂天は、清高だとよくいわれるが、じつさいは官職に執着していた。詩のなかで富貴に言及すると、いつも涎たらたらの口振りだ。杜子美は稷・契<sup>せき</sup>を以て自任していたが、じつさいそうなれたかどうか。ただ子美はやはり氣品が高く、房琯を辯護したのも、やはり正しい。吳必大記す。

〔校勘〕 朝鮮古寫本 本條を缺く

〔注〕 「劉禹錫」は、字は夢得。七七一―八四二。

〔作詩說張曲江無後〕は、「弔張曲江」并引（『劉夢得文集』卷二）を指す。「聖言貴忠恕、至道重觀身。法在何所恨、色相斯爲仁。良時難久恃、陰譴豈無因。寂寞韶陽廟、魂歸不見人。」なお「張曲江」は張九齡、字は子壽。六七三―七〇四。

〔作詩快之〕は、「代靖安佳人怨」二首并引（『劉夢得文集』卷十）を指す。その引に「靖安、丞相武公居里名也。元和十一年六月、公將朝、夜漏未盡三刻、騎出里門、遇盜、薨于牆下。初公爲郎、余爲御史、繇是有舊。今守于遠服、賤不

可以誅、又不得爲歌詩聲于楚挽、故代作佳人怨以裨于樂府云」という。『韻語陽秋』卷三は、このことを述べて、「餘考夢得爲司馬時、朝廷欲渙濯補郡、而元衡執政、乃格不行。夢得作詩傷之而託於靖安佳人、其傷之也、乃所以快之與」という。「武元衡」は、字は伯蒼、七五八―八二五、『舊唐書』卷一五八、『新唐書』卷一五一。

「有一詩暢快李德裕」については、『韻語陽秋』卷二〇に「……李德裕於樂天、不見有隙、德裕貶崖州、亦作三絕快之。其一篇云。『樂天嘗任蘇州日、要勒須教用禮儀。從此結成千萬恨、今朝果中白家詩。』蓋嘗以唐史考之、樂天卒於會昌之初、武宗時也。而德裕之貶、乃在宣宗大中年、則德裕之謫、樂天死已久、非樂天之詩明矣。……」という。「李德裕」は、字は文饒、李吉甫の子。七八七―八四九。牛僧孺らと對立し、牛李の黨争となつたことは有名。白居易は牛僧孺と近かつた。

「舊唐書」卷一七四、『新唐書』卷一八〇。

「稷契」は、后稷と殷契。「自京赴奉先縣詠懷五百字」（『九家集注杜詩』卷二）に「杜陵有布衣、老大意轉拙。許身一何愚、竊比稷與契。……」とある。

「救房琯」については、『舊唐書』卷一九〇下および『新唐書』卷二〇一杜甫傳に、杜甫が上書して辯護したことの記事がある。「天寶」十五載、祿山陷京師、肅宗徵兵靈武、甫自京師宵遁赴河西、謁肅宗於彭原郡、拜右拾遺。房琯布衣時與甫善、時琯爲宰相、請自帥師討賊、帝許之。其年十月、琯

兵敗於陳濤斜。明年春、瑄罷相。甫上疏言瑄有才、不宜罷免。肅宗怒、貶瑄爲刺史、出甫爲華州司功參軍。」（『舊唐書』卷一九〇下）

35 木蘭詩只似唐人所作。其間「可汗」「可汗」、前此未有方子。

木蘭の詩はまったく唐人の作のようだ。その中に「可汗」「可汗」というのは、それまでにはないことだ。李方子記す。

（注）「木蘭詩」は、『樂府詩集』卷二五「橫吹曲辭五」『古詩紀』卷九六の題注には「古文苑作唐人木蘭詩」とあるが、今本『古文苑』にこの句は見られない。また、陳・釋智匠『古今樂錄』にすでに著録されることから、唐以前の北朝民間の作であろうとするのが通説である。

「可汗」は、北方民族の王の稱號。「木蘭詩」には、「昨夜見軍帖、可汗大點兵」「可汗問所欲」の句が見られる。

36 黃巢入京師、其夜有人作詩貼三省門罵之。次日盡搜京師、識字者一切殺之。詩莫盛於唐、亦莫慘於唐也。揚。

黃巢が都に入ると、その夜何者かが詩を作って三省の門

朱子語類論文篇譯注（六）（興膳・木津・齋藤）

に貼って罵った。明くる日都中がくまなく搜索され、字の讀める者はすべて殺されてしまった。詩は唐ほど盛んな時代はないが、唐ほどむごい時代もない。包揚記す。

（校勘）朝鮮古寫本 本條を缺く

（注）「黃巢」は、唐末に王仙芝とともに反亂を起こした山東の鹽賊。八八〇年には洛陽、長安を陥れ、大齊と號したが、やがて敗走した。？一八八四。『舊唐書』卷一五〇下、『新唐書』卷二二五下。

この事件については、『資治通鑑』卷三五四に、「有書尙書省門爲詩以嘲賊者、尙讓怒、應在省官及門卒、悉抉目倒懸之。大索城中能爲詩者、盡殺之、識字者給賤役、凡殺三千餘人」と記す。

37 先生偶誦寒山數詩、其一云、「城中娥眉女、珠佩何珊珊。鸚鵡花開弄、琵琶月下彈。長歌三日響、短舞萬人看。未必長如此、芙蓉不奈寒。」云、「如此類、煞有好處、詩人未易到此。公會看否。」壽昌對、「亦嘗看來。近日送浩來此洒掃時、亦嘗書寒山一詩送行云、「養子未經師、不及都亭鼠。何曾見好人、豈聞長者語。爲染在薰蕕、應須擇朋侶。五月敗鮮魚、勿令他笑汝。」壽昌。



先生がたまたま寒山の詩をいくつか朗誦された。その一つに、「城中 蛾眉の女、珠佩 何ぞ珊珊たる。鸚鵡 花間に弄<sup>あそ</sup>び、琵琶 月下に彈ず。長歌 三日響き、短舞 萬人看る。未だ必ずしも長しえに此くの如くならざらん、芙蓉 寒を奈<sup>いか</sup>ともせず」とあつて、いわれるには、「こうしたものは、實にすぐれたところがある。詩人でここまで至るのは容易ではない。君は讀んだことがありますか。」壽昌が答えるには、「いつか讀みました。ちかごろ浩を身の回りのお世話にこちらに寄越したさいに、錢別に寒山の詩一首を書いてやりました。「子を養つて未だ師を経ざれば、都亭の鼠にも及ばず。何曾か好き人を見し、豈に長者の語を聞きしか。染を爲すは薰<sup>かほ</sup>猶に在り、應に須らく朋侶を擇ぶべし。五月 鮮魚敗<sup>やぶ</sup>る、他<sup>ひと</sup>をして汝を笑わしむること勿れ」というものです。吳壽昌記す。

(校勘) 朝鮮古活字本 「鸚鵡」↓「鸚鵡」

朝鮮古寫本 本條を缺く

(注) 「寒山」は、寒山子とも。大曆年間に天臺翠屏山に隱棲したという。詩三百餘首を傳える。

「城中蛾眉女……」は、『寒山子詩集』では「城中蛾眉女、

珠珮珂珊珊。鸚鵡花前弄、琵琶月下彈。長歌三月響、短舞萬人看。未必長如此、芙蓉不耐寒」と作る。

「亦嘗看來」の「來」は、經驗を示す助辭。

「浩」は、吳壽昌の子。

「養子未經師……」は、『寒山子詩集』では「養子未經師、不及都亭鼠。何曾見好人、豈聞長者語。爲染在薰<sup>かほ</sup>猶、應須擇朋侶。五月販鮮魚、莫教人笑汝」とし、とくに第七句は「販」に作るほうが理解しやすい。「都亭鼠」は、『十六國春秋』卷二に「里語有之、亭都鼠、數聞長者」とある。

38 因舉石曼卿詩極有好處、如「仁者雖無敵、王師固有征。無私乃時雨、不殺是天聲」長篇。「某舊於某人處見曼卿親書此詩大字、氣象方嚴遒勁、極可寶愛、眞所謂「顏筋柳骨」。今人喜蘇子美字、以曼卿字比之、子美遠不及矣。某嘗勸其人刻之、不知今安在。曼卿詩極雄豪、而縝密方嚴、極好。如籌筆驛詩、「意中流水遠、愁外舊山青。」又「樂意相關禽對語、生香不斷樹交花」之句極佳、可惜不見其全集、多於小說詩話中略見二兩。曼卿胸次極高、非諸公所及。其爲人豪放、而詩詞乃方嚴縝密、此便是他好處、可惜不曾得用。」雉。子蒙同。

そこで石曼卿の詩のひじょうによいところ、「仁者 無敵と雖も、王師 固より征有り。無私なるは乃ち時雨、殺さざるは是れ天聲」などの長篇を擧げられた。「私は以前ある人のところで曼卿自らがこの詩を大字で書いたものを見たことがあるが、氣象は嚴肅かつ強靱で、じつに珍重に値し、まさしく世にいう「顔筋柳骨」だ。今の人は蘇子美の字を好むが、曼卿の字に比べると、子美は遠く及ばない。私はその持ち主にこの詩を石に刻むよう勧めたが、今はどこにあるのやら。曼卿の詩はひじょうに雄豪で、また緻密で嚴肅であり、じつにすばらしい。「籌筆驛詩」の「意中流水遠く、愁外 舊山青し」や「樂意相い關して禽は對語し、生香斷えずして樹は花を交う」などの句はほんとうに見事だが、惜しいことに彼の完全な文集は見られず、多くは筆記や詩話のなかからその一二を窺うだけだ。曼卿は胸のうちがじつに氣高く、諸公の及ぶところではない。人となりは豪放だが、詩のことは嚴肅緻密で、そこが彼のよいところだ。惜しいかな、世にはちつとも用いられなかった。」吳雄記す。林子蒙の記録も同じ。

朱子語類論文篇譯注 (六) (興膳・木津・齋藤)

(校勘) 古寫本はかなり異なる。「因擧」↓缺、また「不殺是天聲」の後に、「樂意……」の二句・「意中……」の二句を續けて「此數句極佳・可惜不見其金篇只於話中得一二年」と述べる。「某舊……寶愛」は、「舊嘗見石曼卿書筆大書一長篇、筆力遒勁、「今人喜……遠不及矣」は、「……遠不及之」に作って「曼卿胸次極高」の前に入る。「詩詞」は「詩」に、「不會得用」は「不會得用手世」に、「雉・子豪同」は「雉」にそれぞれ作る。

(注) 「石曼卿」は、石延年、曼卿は字。九九四一〇四一。『宋史』卷四四二。歐陽脩に「石曼卿墓表」(『歐陽文忠公文集』卷二四)がある。

「仁者雖無敵……」は、「曹大尉西師」(『宋文鑑』卷三二、「石曼卿詩集」は「曹大尉西征」に作る)の句。「仁者雖無敵、王師固有征」はその第一・二句、「無私乃時雨、不殺是天聲」は、第一・二句。「仁者雖無敵」は「孟子」梁惠王上の「仁者無敵、王請勿疑」を踏まえる。

「顔筋柳骨」は、顔真卿と柳公權の筆法のこと。歐陽脩「六一詩話」には、「石曼卿自少以詩酒豪放自得、其氣貌偉然、詩格奇峭、又工於書、筆畫遒勁、體兼顏柳、爲世所珍。……」という。また陸游「唐希雅雪鵲」(『劍南詩稿』卷五八)には「我評此畫如奇書、顔筋柳骨追歐虞」とある。

「蘇子美」は、蘇舜欽、子美は字。一〇〇八一四八。梅堯臣と竝稱される詩人。草書に工みであった。『宋史』卷四四

二、『蘇學士文集』十六卷。歐陽脩に「湖州長史蘇君墓誌銘」(『歐陽文忠公文集』卷三二)がある。

「籌筆驛詩」は、『石曼卿詩集』(『兩宋名賢小集』所收)に見える。

「樂意相關禽對語、……」は、「金鄉張氏園亭」(『宋文鑑』卷二四)の句。

〔後記〕 本稿作成の過程で、森田浩一、幸福香織、森賀一恵、錢鷗諸氏のレジュメを参照した。記して謝意を表する。